



# 食の分岐点2018

まとめにかえて

本特集では、いろんな立場から「食の分岐点」について見てきた。

そこで否応なく気づかされたのは、やはり食という文化・制度・システムが、「生存vs快楽」「栄養vs嗜好」「産業vs趣味」「全体vs個人」という「食の二元論」に引き裂かれつつ、惹かれあうアポリア(難問)の現状である。主として前者(図1左辺)は「生産の論理」で語られ、後者(図1右辺)は「消費の論理」で語られるため、言説そのものが二極化している。

もう少し前項(左辺)と後項(右辺)が、柔軟に切り替え、組み合わされたなら、新たな興味深いコンビネーションが生まれそうなものだが、「食の二元論」左右両項を取り持つべき流通と

いう領域にも、柔軟性が足りないためか、なかなかチャネルの切り替えには至らないのが、現状である。

はつきり言って、「食言説」はあふれんばかりに過剰なのに引き換え、「食文化の真の担い手」は、決定的に不足している。

ただ、こうした分岐点を超えて、新しい芽も生まれ始めているようだ。

本特集の巻頭、井上論考では、研究者という従来は「食の二元論」の外側にいた傍観者の立場から一歩進んで、「消費者兼生産者」として服と米の生産・流通に積極的に関与することで、左右両項の変容を引き起こそうとしている。「生存vs快楽」「栄養vs嗜好」「産業vs趣味」「全体vs個人」の中間項に、新

しい可能性が生まれつつある。

次の小林論考でも、「伝統vs流行」「地産食材vs観光消費」の超克が模索される。当たり前すぎて地元で埋没していた食材を、「キラキラ丼」といった敢えて皮相的なネイミングで活性化していく取り組みである。

中嶋論考では、道の駅などの農産物直売所という流通方式に、それまでの生産↓卸↓小売といった固定的な役割関係に代わる、新しい可能性を見出す。

石井論考では、酪農の厳しい現状の中で、乳製品人気や学生のサブカル的人気が、生産力向上にはなかなか結び付かない問題点が指摘された。

藤本論考では、食文化そのものが不変の存在ではなく、世相や時代の動向

## PROFILE

武庫川女子大学教授

藤本 憲一

(ふじもと けんいち)

兵庫県出身

専門分野●情報美学、メディア環境論  
著書●『ポケベル・ケータイ主義!』(共編著)『ポケベル少女革命』(単著)  
『戦後日本の大衆文化』(共編著)他

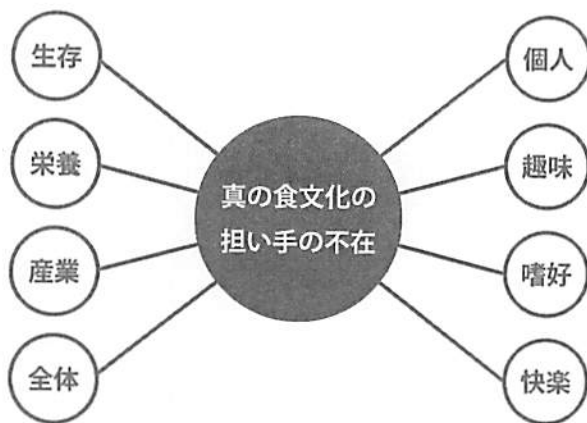


図1

を受けて変容する柔らかな対象である点を、そうしたトレンドを分析する図式(マトリクス)とともに、紹介した。

江原論考では、「食文化」の重要な担い手であるはずの栄養士教育において、まさに重要不可欠な「食文化」が、軽視されがちな現状が明らかにされた。

藤原論考では、食育の現場である学校給食の歴史的経緯をたどるとともに、さまざまな政治的思惑に左右され

る、給食の生産・調理・配膳に関する提言がなされた。

高田論考では、飽食の時代と言われながらも、富と食料の偏りによって、全世界的に見れば、すさまじいまでの健康格差がもたらされている現状が指摘された。

最後に北山論考では、過激な菜食主義者である「ヴィーガン」の言説を取り上げ、その思想的な意味と、同時代に与えるメッセージとを分析した。

また途中、短いエッセイの形式であるが、今年三月において食の文化フォーラム正会員を卒業された、一九五二年生まれの飯野・岩田・佐藤・印南・半田・前川・山極という、いずれ劣らぬ各界を代表する七名の「食の論客」から、メッセージをお寄せいただいた。この年がまさしく、食文化におけるヴィンテージ(豊穡の年)であったことは、まごうことなき事実であるろう。

「食の論客」をうっかり縮めて「食客」と呼びまちがえると、「居候」的な意味合いとなってしまう。しかしながら、中国古典の有名な『戦国策』の故事に

あるように、お家の一大事には「食客」の知恵が国難を救う。その意味で、七名の方々がフォーラム・メンバーから「客分」へと立場を移行されたとしても、その鋭い発言が日本の食文化をリードするとともに、本フォーラムをより一層、高みに導いていただけるよう、引き続きお願い申し上げたい次第である。

また、二〇一五年からは龍谷大学と京都府立大学、今年四月には立命館大学において、本フォーラム・メンバーゆかりの学部・学科・講座が設立され、正規の大学カリキュラムにおいて組織的・系統的に、「食文化」が教育される動きが加速してきたこと、ご同慶の至りである。

まさに、こうした「食文化」教育を身に着けた若き学徒たちこそ、本特集で指摘した「食の分岐点」において、さまざまな危機を乗り越え、固定化した「食の二元論」を克服するパワーを備えていることだろう。彼ら一人一人が、「消費者兼生産者」として、真の「食文化」の新たな担い手として、存分に活躍することを、強く期待してやまない。